

史料館報

第 2 号

この一年をふりかえって

昨年三月「史料館報」を発売してから早くも一年が過ぎ去った。しかしこの一年ほど史料の保存と利用をめぐる論議されたことは最近になく、当館としても史料を保存し利用に供している立場から、その責任を痛感させられた年であった。

すでに周知のことと思われるが、日本学術会議人文社会科学振興特別委員会のもとに、日本史料センター小委員会が設けられて、各地域の国立大学等に資料センターを設置する具体案の審議が進行していたようである。また、国立史料(サービス)センター推進協議会がそこに一

き、資料の能率的な共同利用をはかりたいという、主として研究者側の要請があることを忘れてはならない。なかでも津田秀夫氏の論文「国立史料センター問題に関する若干の所見」(歴史学研究三〇〇号)における当館の利用体制についての二、三の指摘は、職員間に大きな論議を呼んだのである。

こうした学界における史料の保存と利用をめぐる論争のなかで、当館の未来像を確定していく必要を感じている。史料の利用サービスに重点を置くか、史料の基礎的研究を中核としていくか、いずれにしても、現在の体制から出発するには困難ではあるが、当館の運営規定の改訂、研究体制の整備、未整理史料の解消、所轄機関への独立という一連の方針で努力しつつある。他方、民俗資料保存・整理・公開の問題も国立民族学研究所博物館設立の暁には明確な方向が出ると思う。当館のあるべき姿について、読者の御意見が寄せられれば幸である。

四〇年度事業報告

史料展示会 11月7・8日第一

五回近世史料展示会として

「近世寺院史料展」出羽国山形宝幢寺文書を中心に「」を当館で開催。

史料所在調査 左の地区の各地方調査員に依頼して次の結果を得た。(1月末) 滋賀県

(江頭恒治氏) 高島郡マキノ

町浦共有文書外3件、三重県

(家令俊雄氏) 松阪市西黒部

小学校所蔵史料外2件、兵庫

県(今井林太郎氏) 尼崎市貴

志家文書外4件及び大阪市福

島区中堂家文書、愛知県(中

村榮孝氏) 津島市津島神社文

書、岡山県(谷口澄夫氏) 倉

敷市藤戸町中島家文書外6件

刊行物 41年3月所蔵史料目録

第十二集として陸奥国弘前津

軽家文書目録を発行の予定。

なお、前年度に引続き「日本

の民具」第二・三巻(慶友社

刊)の発行に協力。

研究集会 9月29日、10月1日

史料の複写・貸出について

当館では収蔵史料(文書、記録、図書および生活用具)を、研究者に対して研究に資する目的で、でき得る限り閲覧に供しているが、一般の図書館等に見られるような公開施設や人員が整っていないため、充分な便宜をはかることができない現況である。

最近では史料の閲覧のほか複写による利用も増加し、とくに研究以外の目的で複写を希望する例も少なくない。そのため、今後当館の史料が営利のために使用され、著作権の問題が起つたり、当館職員の業務に支障をきたすことがないよう複写心得を改める方針をもっている。以下その要点を紹介する。

1. 複写は主として調査研究に使用する場合に便宜をはかる。
2. 複写とは写真撮影、複製、模写、模造をいう。
3. 複写を希望する者は「史料複写許可願」(当館に用紙あり)を提出し許可を受けること。
4. 複写の対象は当館の所蔵史料に限られるが、寄託史料や著作権のある史料はそれぞれ寄託者、著作権所有者からの複写承諾書を添付しなければならない。
5. 営利のための複写(特別複写)に限らず、研究利用の複写(一般複写)でも、館長が不適当と認めた場合には複写が許可されない。
6. 複写の時は当館内で職員の手指示にしたがって行なうこと。紛失、破損、汚損の場合には賠償を請求する。
7. 複写物からの引用などをする場合、原史料が当館に係るものであることを表示し、無断で再複製、翻刻、販売、刊行をしてはならない。
8. 一般複写は原則として無料

であるが、特別複写の場合には別に定めた料金を文部省会計課に納入すること。

9. 複写物を掲載する時はそのつど「写真掲載許可願」(当館に用紙あり)を提出し許可をうけること。

史料の貸出は原則として一般に対しては行なっていない。しかし公共機関に対しては、研究もしくは史料に関する知識の啓蒙普及に役立つ場合、その他館長が必要と認めた場合、条件を付して貸出すこともある。

特例として貸出を希望する者は、1.借用希望の理由、2.借用希望史料名、数量、3.借用期間、4.輸送方法、5.借用中の保管および賠償の方法、6.貸出希望機関名および責任者名、を明記した願書を当館館長宛に二部提出していただきたい。なお貸出可否等の審査に約一か月を要するのでその旨心得られたい。

の日本図書館協会全国公共図書館研究集会(於富山市)に館員藤村が参加(報告別項)。11月25、27日の全国博物館大会(於東京国立博物館)に館員中村が参加。

三井文庫の移転 昭和24年に旧三井文庫の施設を買上げて文部省史料館とした時から、その一部を受託して来た同文庫所蔵史料をもとに、三井文庫の再建が企画されたのは昭和36年1月であった。その後、移管並に移転に伴う諸種の懸案事項の解決に数年を要したが、このほど両者の了解が成立し、9月22日全部の史料等を新築の三井文庫(中野区上高田五十一一六)へ搬出した。このほか、10月末には本館書庫のメチブロン燻蒸による全館消毒を実施した。また、新収史料の整理・調査などの平常執務の間に、年間二一五人、約一千件の閲覧出納と、品川区教育会などの見学者を受付けた。

地方行政資料の整理について

— 全国公共図書館研究集会に参加して —

昭和四〇年九月二十九日一〇
月一日に富山県民会館で全国公共図書館研究集会が開催され、当館からもこれに特別参加した。研究課題は「地方行政資料の収集と管理」で、昭和三五年ごろから研究の蓄積がされていた由である。図書館と当館との業務内容に多少の相異があるため、討議事項のうち理解の至らない点もあったが、その大要は次の如きものである。

一、地方行政資料の定義（1. 位置づけ 2. 範囲 3. 種類） 図書館の郷土資料とも関連して、地域社会における社会教育的見地と県庁・家別文書など「生の資料」の保存利用の見地とが討論に反映し、論議は複雑多岐にわたった。県庁文書を刊行者・主題のいずれを基準として整理するかも問題となった。

資料の内容の定義としては、広義には地方行政に関する公私

一般のもの、狭義には国およびその出先機関を含む地方行政機関で作製された地方行政に関する資料であり、郷土資料のうちの行政資料とすることにまとめたが、年代の上限は明治元年、廃藩置県と同四年、市町村制実施の同二二年の三案が出て、はっきりした結論は得られなかった。

二、地方行政資料の収集（1. 収集の範囲 2. 収集の方法 3. 収集の協力） 収集の範囲は市町村立図書館は県庁と県立各種機関の実態をあらわすものとし、そのために各図書館の相互協力が必要とされ、また収集する資料の保存基準による選択が問題となった。収集には条令化を漸進的に進めることが希望された。三、地方行政資料の整理（1. 受入 2. 目録 3. 分類 4. 合同目録（総合・所在目録など）） 県庁各課と図書館の連絡の必要、

とくに県庁の文書破棄に図書館員が立ち会うことが論ぜられた。また受入の事務簡素化のため登録せずに受入番号のみで処理する例も報告されていた。整理に当っては、保管されていた形を崩さないで、配架番号をつけるが、分類内を年代順とする、県庁の課の統廃合はあってもできるだけ県文書分類表によって行なうという意見は参考となった。さらに昭和三〇年以降のファイリングシステムによる文書の整理の困難が論ぜられた。一般刊行物は「生の資料」と別個に取扱

い、地域性を加味したNDCで分類し、カードよりも詳細な目録の刊行が望まれた。ただし、目録にNDCをそのまま適用することは再考を要するなどの意見が出された。四、地方行政資料の管理と利用（1. 管理 2. 利用） 収集資料の保存基準、県庁側の必要上による公開・非公開の区別、製本化、副本の複製と貸出、「生の資料」と裁判の関係、紛失防止策、マイクロフィルムによる保管などの問題が討議されたが、時間の都合もあり具体的成果を得るには至らなかった。

五、図書館と史料センターの問題 公共図書館としての立場から各種各様の意見が開陳されたが、おおよそ次のような問題が討議された。図書館が現在まで史料を取扱ってきた事実を評価されなければならず、将来の問題としては、現在所蔵している史料の帰属、文書館と図書館の提携、国、県、市町村立の各図書館における相互処理、図書館の予算費目と文書館の問題などで、いずれも未解決のまま持ちこされた。これらの地方行政資料を含めて、史料の消滅防止のために図書館、また当館も努力しているが、国家的見地からなんらかの対策をなすべきではあるまいか、またそのような気運も出てくるべきではないかと思われた。本研究集会で取り上げられた諸問題は、当館にとっても重要な関心事であり、その意味で有益であったといえよう。

民俗資料の保存管理 △付票△

収蔵資料に付票をつけて保存された。

第三の形式 民博時代、この形式は、さらに複雑となり、同大の付票に、種類、製作地、所用者、収蔵年月日、寄贈者、備考欄が新設され、記入箇所は一四項目となり、ここに現行付票の形式が完成されたのである。

しかし、その形式、書式は、必ずしも一定でない。例えば、当館資料に徴しても、旧アチック・ミュージ엄時代より財団法人日本民族学協会時代に到る間、およそ三度の大改訂が加えられていたのである。すなわち、

第一の形式 アチック初期の収集品にみえ、荷札を利用するもの。書式も、思いのまま、呼称、採集地、用途など摘記する。第二の形式 やがて、資料も次第に増加し、付票形式を一定化する必要が生じたのであろう。

第四の形式 その他副一cm長さ3cmの小札を用いたものが若干見出される。日本青年館旧蔵地、採集年月日等の記入欄を設け、横書きの蒲酒を付票が用意単に記入する。

さて、当館では現在、原則として付票は用いられていない。その理由は、主として、次の如くである。

一 従来の形式の付票は 案外破れやすく、剝離しやすいこと。
二 展示中、付票をとって陳列されることが多く、誤って付替えられた場合、無用の混乱をまねくこと。

三 記入に意外の手間を要すること。
四 コスト高につくこと。

五 原簿より転写の場合、誤記が起りやすく、混乱を生ずること
(記入項目欄が多いことは、それだけこの可能性を高める)

六 個体の識別は、資料に直接、収蔵番号を書き入れ、写真、計測などを記録化することによって照合なし得ること。

七 当館の学術資料保存、利用の現状に鑑み、とくに、付票を附する必要の生ぜざること。等々。

註 ただし、アシナカ調査の際、調査票を加味した一種の付票が用いられた。その詳細は「調査記録」項にゆずる。

第二の形式

- | | | | | |
|----|---|-----|---|---|
| 1. | 所 | 蔵 | 箇 | 所 |
| 2. | 収 | 蔵 | 番 | 号 |
| 3. | 種 | (一) | 名 | 称 |
| 4. | 類 | (呼) | 称 | 地 |
| 5. | 名 | 所 | 用 | 年 |
| 6. | 採 | 集 | 月 | 日 |
| 7. | 採 | 集 | 者 | |
| 8. | 寄 | 贈 | | |

Attic Museum. Tckyc, Japan.							
Part 1				No 2			
		3					
		4					
Loc		5					
Date		6					
				Coll. by	7		
				Ex. by	8		

9 cm

(5 頁下段より続く)

に向かつて、浅井欄子を中心に「大名文書の分類」をテーマに、二月二三日・一月七日・二一日、二月九日と四回の研究会を重ねた。この成果が定着していることを、強く念願している。

館内研究活動報告

＜研究体制をどう組むか＞

元来、近世史料の収集・保存・利用・史料への理解（啓蒙）を通じて史学の研究に資することを目的にしている（文部省設置法施行規則第二二条）当館は、現状では閲覧機関、研究機関、保存機関のどの一つの体制にも徹していない。しかし、日進月歩の「史学の研究に資する」ためには、もちろん運営の中心にいる研究職員が、研究者として積極的に近世史研究に従事できる、主体的・客観的条件の具備が第一に必要である。問題は、そのことを前提にして、近世史研究一般ではなく、学問的批判にたえうる、機関としての独自の史料研究の体制を確立することであろう。それは任意の研究者の、つみ重ねのない議論からは生まれて来ない。機関としての研究体制が無いところでの、収集も整理も基本的にはあり得ない。

こうした認識は、毎年度の事業計画を決める定例会議の議論が、常にこの機関の性格・運営の基本方針に立ち戻ってしまふことへの深刻な反省に基づいている。そこで、望ましい研究体制を組むために、当館では、まず第一には研究業務を中心とする運営要項の改訂案の検討・作成を、第二には研究機関指定への予算要求を続けている。この要求は、不幸にしてまだ実現する徴候がない。

＜機関研究＞

三九・四〇両年度に行なった機関研究は、右の路線の一つとして、館員の共同研究体制を作るための重要な布石と考えている。既存の研究機関が研究の物的要件の整備・充実のために行なう場合と、スタートにおいて大変に違っている。近時の人員削減もあり、本務以外の庶務的業務の増大が研究の推進を渋滞させているが、四〇年の状況を

概略報告しておきたい（前号参照）。

八月までに、まず会津若松では、著名な商人司簗田家の伝来文書のほか、町検断坂内家旧蔵文書（市立図書館蔵）および藩政史料の基礎調査を行ない、桑田家文書の前半を撮影した。次いで鳥取図書館の池田家文庫の財政・町政関係史料を調査した。同地は町方史料が欠損しているので、現時点ではこれ以上の調査は望めない。前後して基礎調査に当たった甲府は、検討の結果、主調査地から除くことになった。さらに岡山出張では、岡山大学図書館所蔵池田家文庫、市立図書館蔵国富文庫を調査したほか町方史料の発掘に当たったが、後者の成果は今後とも望めそうにない。

秋季の第二次岡山調査では、「撮要録」・「市政提要」・「留帳」・国富文書を含め両図書館の主要文書の撮影に当たった。第一次も合計してフィルム（百呎）一五本に達する。この直後、簗田家の格別の好意により「御

用日記」九〇冊の貸出を得て、二四本のフィルムに収めた。続いて昨年度に続く第二次糸魚川調査を契機に、総町年寄小林家の「御用留」（全八五冊）、新田町名主池原家文書の携出を許されて館内で総計三五本の撮影に当たった。補修を続けながらこれらの史料撮影はまことに困難をきわめるものであったが、そうした一見、初歩的な共同作業のなかから新しい体制を見出して行きたい。同時に、史料所蔵者各位を始め、今回の研究調査に御協力下さった方に厚く感謝の意を表すると同時に、それらの好意に応えるためにも調査の結果を公表したいと考えている。

＜史料研究会＞

史料の分類・整理を主題にし、本館研究会も、今年度には始まった新しい意欲的方向であると自負している。第一回は、大野瑞男「史料の分類整理の前提」（七月一六日）、続いて津軽家文書目録作成という具体的目標（以下４頁下段へ続く）

所蔵史料一覽概表(一)

但寛政年度順、※印は点数百点以下の少数史料、○印数字は既刊目録集数

- 美濃国多芸郡高田町千秋家文書(地主)
 武蔵国川越(後ニ出羽国山形) 福井家文書(秋元藩士)
 常陸国土浦土屋家文書(土浦藩主)
 ※越後国頸城郡川上村松岡家文書(庄屋)
 美濃国多芸郡志津村高木家文書(名主)
 ※和泉国日根郡佐野村食野家文書(地主)
 ※住友家大名貸証文類(旧蔵地不明)(両替商)
 ※日本総図 一舗
 ※近江国甲賀郡妙感寺村奥村家文書(庄屋)
 ※伊賀国名張郡夏見村深山家文書(庄屋)
 ※越中国新川郡吉島村神保家文書(御扶持人・十村並)
 美濃国石津郡市之瀬村桑原家文書(庄屋)
 近江国甲賀郡田堵野村大原家文書(甲賀古土)
 信濃国佐久郡御馬寄村町田家文書(名主)
 武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書(名主)
 武蔵国多摩郡後ヶ谷村杉本家文書(名主)
 信州高嶋藩領村々宗門改帳
 伊勢国松坂比佐古文庫旧蔵商業史料
 尾張国名古屋知多屋文書(商家)
 ※武蔵国多摩郡八王子河野家文書(旗本・千人頭)
 近江国蒲生郡古川村中島家文書(庄屋)
 信濃国安曇郡保高町村小川家文書(庄屋)
 信濃国筑摩郡今井村桃井家文書(名主)
 和泉国大鳥郡上神谷豊田村小谷家文書(割元庄屋)
 ※遠江国山名郡久津部村文書(庄屋)
- ※紀伊国牟婁郡新宮水野家文書(紀州藩士)
 美作国西北条郡田辺卿西一宮村中島家文書(庄屋)
 美濃国多芸郡大場村松永家文書(庄屋)
 ※伊勢国多氣郡齊宮村乾家文書(神領庄屋)
 三河国八名郡兼本村菅沼家文書(名主)
 京都徳大寺家文書(公卿)
 信濃国高井郡東江部村山田家文書(名主)
 長門国厚狭郡際波村三隅家文書(庄屋)
 越後国蒲原郡石塚・深町・金沢村文書
 美濃国多芸郡根古地新田村文書(庄屋)
 ※尾張国名古屋井桁屋三輪家文書(商家)
 武蔵国多摩郡連光寺村富沢分家文書(旗本天野氏給地賄名主)
 武蔵国多摩郡寺方村佐伯家文書(名主)
 美濃国本巢郡曾井中島村青木家文書(庄屋)
 ※美濃国厚見郡日野新田村村瀬家文書(庄屋)
 ※武蔵国足立郡桶川町府川家文書(宿問屋・町名主)
 京都久世家文書(公卿)
 武蔵国多摩郡中和田村石坂家文書(名主)
 ※上総国長柄郡粟生野村秋葉家文書(名主)
 ※武蔵国豊島郡三河島村松本家文書(名主)
 越中国上野郡萩原村黒田家文書(肝煎)
 信濃国小県郡瀬津西町村高橋家文書(商家)
 ※近江国坂田郡醒ヶ井村(宿)文書
 ※越前国丹生郡新保浦両林家文書(浦庄屋)
 ※信濃国安曇郡渋田見村師岡家文書(庄屋)
 ※羽前国西村山郡新宿村今井家文書(地主)
 京都万屋小堀家文書(両替商)
 ※美濃国本巢郡文殊村文書

群馬県史料

新潟県刈羽郡・東頸城郡下村々書類

※近江国野洲郡開発村高谷家文書(材木商)

近江国蒲生郡南津田村文書(幕末村方史料・戸長役場)

新潟県下不動産船舶公証書類

駿河国庵原郡今宿村池田家文書(名主)

※武蔵国埼玉郡袋山村他越ヶ谷領村方文書

※武蔵国埼玉郡酒巻村年貢割付状

※京都三条家文書(公卿)

※越後国蒲原郡下新村本間家文書(地主)

※下総国相馬郡塚崎村守家文書(神官)

※山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書(庄屋)

陸奥国白川郡中石井村文書(名主)

⑨出羽国村山郡山形宝幢寺文書(新義真言宗寺院)

下総国北相馬郡河原代村木村家文書(旗本土屋氏給地賄名主)

岡山・広島・鳥取県下諸村文書

※信濃国筑摩郡神戸村丸山家文書(名主)

※出羽国村山郡観音寺村岡田家文書(名主)

※出羽国村山郡大町村文書

大和国吉野郡中増村文書

兵庫津津名・三原郡村々戸長役場書類

美濃国山県郡東深瀬村林家文書(庄屋)

※美濃国石津郡内記村伊藤家文書(庄屋)

※美濃国郡上郡高砂村小酒井家文書(地主)

※三河国額田郡東河知和村内田家文書(額田手永大庄屋)

※三河国碧海郡刈谷太田家文書(新田地主)

越後国刈羽・頸城郡下村々及諸家文書

※三河国碧海郡小垣江村文書(庄屋)

※尾張国丹羽郡犬山鈴木家文書(医家)

滋賀県坂田郡志賀谷村他六ヶ村戸長役場書類

近江国蒲生郡鏡村玉尾家文書(庄屋)

※磐城国白川郡川上・川下村文書(庄屋)

上総国夷隅郡押日村小高家文書(名主・医家)

※京都二条家文書(公卿)

岐阜県中島郡大須村文書(戸長役場)

※速江国榛原郡村々免状

※寛文度御朱印目録留 全一七冊

尾張国海西郡鰯浦村木下家文書(地主)

※若狭国敦賀郡敦賀平山家文書(商家)

甲斐国山梨郡下井尻村井尻家文書(名主)

長野県北佐久郡小諸町・大里村戸長役場書類

信濃国佐久郡芦田宿今井家文書(神官)

美濃国多芸郡下笠村諸家文書

肥前国小城鍋島家文書(小城藩主)

龜山藩板倉氏旧蔵伊勢国国絵図文書(元禄度国絵図作成一件)

書類

※越後国頸城郡行野村横尾家文書(地主・庄屋)

※若狭国上中郡新道村文書(庄屋・戸長)

※若狭国上中郡安賀里村岡本家文書(地主)

※岐阜県不破郡荒尾村土屋家文書(戸長)

京都平松家文書(公卿)

※大和国添上郡標本村文書(庄屋・戸長)

※三河国額田郡長嶺村文書(名主)

※信濃国佐久郡内山村文書(名主)

※近江国愛智郡南清水村大橋家文書(庄屋)

※三河国幡豆郡楠村文書(庄屋)

(以下次号)

新収史料紹介

信州佐久郡海尻村文書

幕領の村方文書で、寛永より

元文に至る検地帳写、貞享以降

幕末までの千曲川およびその支

流の川除や橋・往還の普請帳類、

延宝以降の年貢割付状・皆済目

録を主とする。他に幕末の稻子

新田村入用夫銭帳五冊を含んで

いる。(現長野県南佐久郡南牧

村海尻、数量一八三冊、一三二

通、三綴、三枚、五袋、一括)

越後国魚沼郡下船渡村山家文書

天領村庄屋文書(但し、天和

三年以前は高田領)で、貞享四

年以降の年貢割付状・安永以後

の皆済目録のほか、貢租、用水・

温泉普請等に関する枝郷分を含

む村方の訴願届書類と、同家の

質地その他の貸借・売買証文等

である。(現新潟県中魚沼郡津

南町下船渡、数量六冊二九二通、

二綴、三鋪、五枚)

信濃国埴科郡東条村相沢家文書

同村北組の名主役を勤めた相

沢字忠治家の文政末から明治初

年に至る史料である。割付状・

御触留などの村方史料のほか、

同人が文久三年に叔父の跡式を

継いで松代藩御城番組となつて

からの諸史料を含んでいる。

(現長野県埴科郡松代町、八九

冊、一〇三通、一三綴)

摂州三島郡氷室村吉田家文書

元祿から明治初年に至る主と

して元文以降の庄屋文書である。

年貢・夫食・拝借・諸普請およ

び六ヶ村入会蛇山関係書類など

が主なものである。小作・家計

関係の私文書も含む。(現大阪

府高槻市氷室、数量九六〇冊、

一一九通、二四綴、七枚、一括)

信濃国松代藩家臣誓状

同藩の幕末期における重臣山

寺源太夫(常山)へ宛てた、家

老真田図書・謙原石見を始めと

する家臣らの書状と、山寺の書

状控を中心として、高田幾太・

草間一路らの書状などである。

(現長野県埴科郡松代町、一冊、

一〇〇通、一枚、二綴)

人事異動

()は前職

昭和四十年三月三十一日 調査

員所三男任期満了

同年四月十六日 西村瑞夫(学

生課)当館勤務

同年六月一日 館長吉里邦夫は

大学課長へ転出し、須田八郎

(技術教育課長)が就任

同年十一月十五日 遠藤武退職、

文化女子大学教授へ転出

同年十二月一日 調査員に遠藤

武を委嘱

昭和四十一年二月十六日 小和

田武紀(初等中等教育局主任視

学官)が専任館長に就任し、須

田八郎館長兼務を免ぜらる。

◎編集後記◎

下さい。

第一号を出してから早くも一

年。この第二号は、もっと早く

出したかったが、いろいろな事

情でおくれてしまった。小所帯

での、こうした情報活動のむず

かしさを痛感する。

所蔵史料一覧は、簡略すぎて

実効の薄いのをおそれたが、幸

いに御好評を得た。一応、次号

で完結するので、逐次主要史料

の概要を紹介していきたい。

史料の散逸防止については、

以前からも要望は強いのだが、

具体的な対策は容蛇に実現しな

い。根本的な解決を計らないと、

将来必ず後悔するだろう。

史料の保存と利用と研究とに

従事する機関が、その成果と疑

問点を相互に交換して関連を強

めることも今後の課題である。

前号については、いろいろと

有益な御批評をいただき感謝し

ている。館報の新しい企画に反

映させたいので、今後も御意見

御希望をお寄せいただきたい。

近く新しい要覧を発行する予

定なので、御希望の向はお申出

下さい。

史料館報 第二号

昭和四十一年三月三十一日

文部省史料館発行

東京都品川区豊町一

一六〇

印刷所 盛光印刷所

電話 七八三二四四九

電話 二六二一五九九